

POLE

北海道ポーランド文化協会誌「ポーレ」
第38号 1997. 11. 1

発行
北海道ポーランド文化協会
〒060 札幌市中央区南2東2
河合楽器製作北海道支社
電話 011-231-8661
FAX 011-221-4936

ポーランド訪問団に参加して

松井俊和

ワルシャワ、ウッチ、チェンスト
ホーヴァークラク、フーグダンスク
と、ポーランドを縦断した旅は、短
い期間にもかかわらず、とても実り
多い、そして印象深い旅になりました。
今回、今回の一番の目的であった、
ウッチでのポーランドの人たちとの
交流会は、両方の参加者によって演
ぜられたことが大歓迎されたのはも
ちろんですが、ポーランドの人たち
が、特に若い人たちが大勢来てくれ
たことが最もうれしいことでした。

訪問団の一人の方が言われたよう
に、「以前に比べて、ポーランドの
人たちの表情が、すごく明るくなっ
た。前には決して見られなかった笑
顔がたくさん見られるようになった」
という言葉は、旅の間じゅう実
感されました。ポーランドにとつて
「社会主義の時代はなんだったんだ
ろう？」という問がなされるにせ
よ、その時代に「ポーランド人の表
情が非常に堅かった」にせよ、かい
間見たポーランドの生活は、あの時
代であっても彼らは「ポーランド
人」であり続けたに違いなかったこ
とを確信させてくれました。そして
これから、ポーランドはずっと素晴

らしくなってゆくのは、
ではないでしょう
か。その可能性が大
きいことは、結局の
ところ、ポーランドの歴史の深さに
あると思われます。

旅のひとつまひとこまが、それぞ
れにとっても素晴らしかったのと言
うまでもありませんが、個人的に一番
印象の強かったのは、わがままを聞
いてもらって行くことのできたオシ
フィエンチムでした。人間の髪で
作った布、靴や眼鏡のやま、チクロ
ンの缶、縞の囚人服を着た子供たち
の写真、あるいは、コルベ神父の閉
じこめられていた独房、銃殺の壁、
そして、ガス室そのもの、それらが
語るものは計り知れないでしょう
が、しかし、ビルケナウの、夕方で
はありましたが、ぬけるように高い
空の下にはてしなく並び立っている
かつてのバラックの煙突の列は、
いったいどう表現したら良いので
しょうか。焼いた灰を埋めたあと
の池は、思っていた以上にずっと小
さいものでした。きつと、すごく深
いのだと・・・。あのようなことは、
殺される人間のためになされるの
ではなく、きつと、生きていく人間が
自分のためにやるのではないか、そ
れゆえに、殺される側は「犠牲」と

呼ばれるのではないかと、思ったり
しました。

私は「お城」が好きなので、ヴァ
ヴェル城やマルボルクのお城はとて
も「ファンタスティック」でした。

ウッチの吉田先生には旅の間じゅう
ずっとお世話になりました。ありが
とうございました。そして、旅の企
画から何から何までやっていただ
いたスタッフの皆様、ありがとうございました
ました。初めてのポーランド旅行
のすばらしさは、皆様のおかげでし
た。

ウッチの交流会に

百五十名の観客

十月五日にポーランドのウッチで行
われた北海道ポーランド文化協会と日
本協会ウッチ支部との交流会では、会
場のホールに日本側から訪問団全員の
二十六人、ポーランド側から約百五十
人が参加して行われた。ウッチ側およ
び、ボ文協会長の谷本一之氏の挨拶の
あと、吉田勝一氏の司会で、ポーラン
ドの合唱団による日本の歌、安田文子
さんのショパンと日本の曲のピアノ演
奏、霜田千代磨さんの詩の朗読、齋田
道子さんの生け花実演、依田明倫氏の
俳句と俳画の話などが行われ、観客か
ら盛大な拍手を受けた。最後にシユ
ワ・ジェヴェチカ（森へ行きましよ
う）を全員で歌って閉会となった。

ポーランドの鶯鳥と犬

依田 明倫

今回北海道ポーランド文化協会主催のポーランドの旅に一員として参加させていただいた。団長の谷本会長、事務局の小笠原教授、東京から加わった栗原教授それぞれ北方圏の権威者であり、研究室がそのまま移動し学ぶというような恵まれた十日間であった。まず、諸先生にお礼を申し上げ、更に事務局の小笠原先生、小林さんに勝手振る舞いの多い俳人を代表してお詫びを申し上げたい。

鶯鳥と犬

ショパン生家。幾多の城塞、教会、かつて市場都市として栄えたクラクフ、バルト海に面した商工業都市グダニスクを一見した。

農村部ではどの家でも鶯鳥や犬を飼っていて、まことのどかそうであった。事実、朝の散歩やバスの窓から見たのであるが、鶯鳥が主婦のあとについてぞろぞろと歩き、彼女が立ち話をすると、首を上げて聞いていてここから忽ち童話や、ピアノの小曲が生まれそうな感じであっ

た。背景に馬鈴薯、小麦、更に玉葱、林檎、ブルンの収穫の終えた大地がひろがってこそその世界である。

だが思った。鶯鳥や犬は塀や柵のない夜の家のまわりに居て、鼠一匹通っても敏感に察し、ことに鶯鳥は他人の手なずけることの難しい家禽で「グワアグワア」と、見ず知らずの人には鳴き立て主人にすぐ知らせる。ここに動物との一体感の生活が現存し、ポーランドの歴史の一員としてこれからも受け継がれてゆくことであろうと思った。

どの街でも堂々たる犬が飼われていた。シェパード、大型ワイヤテリア、プードル、銀行番や刑務所番になったこともある、ドーベルマン、猟犬のセッター、ロシヤ貴族が狼狩りに使ったというボルゾイ、国中が犬の展示会のようなものである。ここにクラクフやワルシャワの公園では夕方には放してよいらしく、広大な敷地を自由に走り、それぞれの犬が本質的な姿で駆けているのが美しい。お互いの犬は嗅ぎよることがあ

あってもすぐ離れ、いがみ合うことなく、主人の視線内に居るのがよく判った。これらの犬は夜には家に入れられ居間か寝室の戸口で寝ると聞かされた。音に敏感であり、日々の運動で瞬発力のある大型犬が危険物に向かうときの姿を思うと、一見おとなしそうに見えるが、犬自身の自負と誇りが目の前に迫る感じであった。

犬も鶯鳥もポーランドの歴史ある地下組織の守り主のような気がしてならず、次回には犬や鶯鳥の入手経路、日々の生活ぶりをじっくり観察し、そのうしろに家庭があり、村があり、街がある、その目に見えない

連帯がポーランドを形づくっているのではないかという私の勝手な想像というか、直感の赴くままに原点をさぐりたいと思った。

いずれにしろショパンを生み、キュリー夫人を生んだ国土の自由さと聡明さを少し垣間見させていただき感謝の一語である。

ポーランド国土のうねり葺生え
ダリヤ赤白存分に雪前と
秋耕の国土歴史とどまらず
榆落葉エヴァへ感謝の一曲と

以上 依田明倫

総会・懇親会のご案内

北海道ポーランド文化協会 1997-98 年度の総会・懇親会を次のように開催いたします。ご家族、お友達もお誘い合わせの上ご参加くださるようお願い申し上げます。

日時：1997年11月28日(金)午後6時30分より
場所：すみれホテル(☎261-5151;中央区北1西2)
会費：3500円(当日申し受けます)

ピアノ演奏 ショパン/ノクターンOp.9-2
ショパン/マズルカOp.7-1,17-4
演奏 谷本聡子

シュワ・ジェヴェチカ
(森へ行きましょう)を
一緒に歌いましょう。

「ポーレ」編集委員会

小笠原正明・斎田道子
佐々木保子・安田誠子

〔連絡先〕621-1783(斎田)

POLE 第 38 号(1997.11.1)目次

松井俊和「ポーランド訪問団に参加して」、ウッチの交流会に 150 名の観客……………	1
依田明倫「ポーランドの鷺鳥と犬」、第 11 回総会・懇親会(1997.11.28)のお知らせ……………	2